

にし、豊かな陰影を表現する。3は伝統的フランスの歌に用いられた1音節1音符のシラビック様式を基本にしながら、律動ある会話調の朗唱法を取り入れ用いた。

この歌曲集は、上記の3つの特徴を緻密に融合させ、散文詩「博物誌」のもつ会話的な特徴を効果的にいかし、斬新で歯切れのよい作品にした。「博物誌」に登場する動物の動作、性格を簡潔に音楽で描写した。あたかも視覚的に鑑賞される5枚の絵画のごとき歌曲集と言える。鑑賞後は、人間的に暖かみある諧謔を感得し、この作品の持つ爽やかさ様式の明晰さを、即ちラヴェルは独自のフランス近代歌曲 *Mélodie* を発展させた。

引用文献

1. Léon Guichard, JULES RENARD, *HISTOIRES NATURELLES*, GF-Flammarion, 1994, p.8
 2. Arbie Orenstein, *RAVEL MAN AND MUSICIAN*, Columbia University, 1975, p.51
 3. 松平頼則「近代和声学」、音楽之友社、昭和44年、p.290
 4. ヴュイエルモーズ「ガブリエル・フォーレ」人と作品、家永和夫訳、音楽之友社、p.49
 5. CH. ケックラン「和声の変遷」清水脩訳、音楽之友社、昭和56年、p.16
- ・譜は M.Ravel, *HISTOIRES NATURELLES*, Editions Durand & C^{ie}, Paris, D & F. 6867

参考文献

- ・Léon Guichard, JULES RENAED, *HISTOIRES NATURELLES*, Op.cit,
- ・ジョルジュ・レオン「ラヴェル」北原道彦・天羽均共訳、音楽之友社、昭和49年
- ・作曲家別名曲解説ライブラリー⑪「ラヴェル」別宮貞雄執、音楽之友社、1993
- ・CD、*Debussy • Rave—Mélodies*, N. Stutzmann, alto, 09026-60/899-2
- ・LP、*Maurice RAVEL/Mélodies*, G.Souzay, baritone, X-7622
- ・Livre-cassette, J.Renard, *Histoires Naturelles*, Lu par N.Robin, ISBN 2-87859-009-0

音階Ré_m、Do_m、Si_b_m、Sol_#_m (=La_b_m)、Fa_#_m、Mi_m、Ré_mで、さらに同部高声が ré から 1 Ova. 下へ半音順次連続し、速度を落とすしながら Retenu 強調し皮肉たっぷりに表現する (譜15)。

譜 15

第37、38小節では、第8詩句後半にピアノ部が譜12を再現しする。第39、40小節では穏やかな拍子 9/8に変わり、第9詩句「時に彼女は庭を去り消える」

Parfois elle quitte la cour (以下略) は、速度を大変ゆっくり Très lent に変え、彼女の居ない束の間の平和を示す。

第43から45小節は、ピアノ部の低音_bmi と_bsi上 に同部上声が_bmi から 2 Ova. 下へ、32分と62分音符を組み合わせ連打し、半音順次下降進行する。この部分は、正に彼女がけたたましく戻ってくる様を、続いて第44、45小節は激しく駆け回る動作を描写する (譜16)。

譜 16

歌部第17詩句「私はそれ (卵) を探せる、何とも楽しい」 Je peux le chercher (以下略) は、続いて最終第18詩句「それから彼女は傀儡のように埃にまみれ駆け回る」 Et elle se roule (以下略) は、諧謔一杯に歯切れのよい会話調で朗唱する。最後を締めくくするようにピアノ部が32分音符9連で、曲初 (譜12) を再現し華麗なホ長調で終止し、この歌曲集を閉じる。

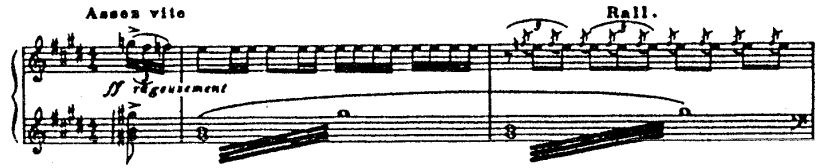
Ⅲ. おわりに

上記Ⅱの分析から、この作品は3つの特徴に纏められる。即ち1-速度、2-音組織 (音列、和音)、3-散文詩の取扱。1は拍子、装飾的なリズムを多彩に用いることにより、速度を微妙に変化させる。2は旋律として全音、半音音階および旋法を用い、和音として平行および変化などを用い、安定した機能的バス進行上で精緻に組み合わせる。これら1と2は、作品を色彩的にあるいは暈しながら明晰

4/4-9/8-12/8-9/8-12/8-
4/4-2/4-4/4と変化する。演
奏時間は約2分15秒。

曲初は、ピアノ部の高音が半
音順次下降の装飾音を、続いて32
分音符の同音連打および短2度
の短打音を反復させ、同部にホ
長調の主和音I¹が32分音符連打のリズムで軽快に奏され、ほろほろ鳥の砂を蹴散らし、けたたましく登
場する様を描写し始まる (譜12)。

譜 12



歌部第1詩句「それは私の庭の僂儂です」C' est la bossue de ma cour. および第2詩句「彼女は自分の
瘤のせいとしか思っていない」Elle ne
rève que plaies à cause de sa bosse. は、
会話調で朗唱される。いざ、戦闘開始、
彼女のご登場。ピアノ部はスタッカート
のリズムを歯切れよく奏す。歌部は
発音を明確にすることで、旋律の輪郭
を生かす。

譜 13



第3詩句「雌鳥らは彼女に何も言わ
ない」Les poules ne lui disent rien : と無視し取り合わず、対照的に第4詩句は「突然、彼女は突入し執
拗に雌鳥らを攻撃する」Brusquement, elle se précipite (以下略) と、軽快に表現される (譜13)。

第17小節ピアノ部の平行和音上行、続いてsiから10va. 上laへグリッサンドで、歌部第5詩句後半「そ
れから、痩せ骨張った足を全速力で」et, de toute la vitesse de (以下略) が16分音符の速さに、明確な
発音や抑揚で皮肉たっぷり朗唱し、彼女が全速力で突進する様を、siから20va. 上へ白鍵のグリッサン
ドで狙うように、的確に juste 描写する (譜14)。

譜 14



第22小節から譜13のリズム音型を拡張再現したのち、歌部の第8詩句後半「下がった尾、禿げ頭をから
かう」qu' on se moque de sa taille, (以下略) は、発音を明確にし朗唱する。その間ピアノ部は和音が全

アノ部の高音が32分音符から同9連と速くなり、白鳥の水面に遊泳する様を印象づける。

第8詩句「彼には幻滅な時間しか残らない、何故なら雲は少し遅れて戻ってくる」Il ne reste qu' instant désabusé, (以下略) は、ピアノ部和音Mi_m、Ré_#、Ré_m、Do_#、Do_m、Siの長短を組み合わせ順次半音連続下降し、幻想的な響きを醸しだす(譜9)。

第11詩句「だけど僕は何を言ってるんだ?」Mais qu' est-que je dis? 以下第12-13詩句は、第6、7詩句同様に会話体が用いられる。この手法は一瞬現実に場面転換する。最終音は、主和音を用いピアノ部が第5音を、歌部が第3音を用い不完全終止する。大変あっさり律動的に très sec et bien rythmé で軽やかに説明し終わる。

4. 「翡翠」 Le Martin-Pêcheur

詩は、第75番、7詩句構成。第4-6詩句は1段落構成。

曲は23小節構成。速さは決して遅くなく On ne peut plus lent - 非常に静かに Tres calme と奏される。調は嬰へ長のなかで微妙に陰影を付ける。拍子は 3/4-7/8-6/8-4/4-2/4-3/4-4/4-3/4 と変化する。演奏時間は約3分。

曲初は、ピアノ部高音を半音の順次連続下降で始まる。

歌部の第1詩句「僕はとても珍しい気持ちでした」 mais je raporte une ra émotion. は、ピアノ部が静寂な雰囲気奏し、翡翠を逃がさぬよう、歌部の発音を慎重に溶け合わせ、灰色色を醸しだす(譜10)。

譜 10

第4詩句「それは長い茎の先に大きな青い花のようだ」 Il semblait une grosse fleur bleue (以下略)、第5詩句「竿は重さで曲がる」 La perche pliait sous le poids. は、珍しい 7/8拍子で、フリギア旋法を用い、幻想的な雰囲気を表す(譜11)。

譜 11

5. 「ほろほろ鳥」 La Pintade

詩は第6番、18詩句構成。詩句、第5-6、第8-10は各1段落構成。

曲は54小節構成。速さは十分速く Assez vite - 中位 Modéré - 非常にゆっくり Très lent と奏される。調はホ長 - 変口長 - ホ長と転調する。拍子は 4/4-5/4-2/4-4/4-2/4-4/4-2/4-4/4-2/4 -

譜 7

始まり Fa₇、Si b₇²、Mi b₇ と連結奏し、静寂な夜の背景を絵画的に表現する (譜7)。

3. 「白鳥」 Le Cygne

詩は第10番、13詩句構成。詩句、第1-4は1段落構成。

曲は39小節構成。速度はゆっくり Lent - 中位 Modere - 初めよりゆっくり Plus lent qu, au début - 大変ゆっくり Très lent 奏される。調は口長 - 変ホ長 - ハ長 - 口長と変化する。拍子は4/4 - 5/4 - 3/4 - 2/4 - 3/4 - 4/4 - 3/2 - 4/4 - 2/4 - 3/4 - 4/4 - 3/2 - 5/4 - 3/4 - 4/4 - 2/4 - 4/4と頻りに動く。演奏時間は約3分30秒。

曲初は、ピアノ部が16分音符7連を、PPと大変優しくペダルを包んで très doux et enveloppé de pédales の指示で繊細に始まる。

歌部の第1詩句「彼は池に浮かび、白い船のよう、雲から雲へ」Il glisse sur le bassin. (以下略)は、そのピアノ部の全音階のリズムに乗り歌われる。あたかも1枚の幻想的な絵画を連想させる (譜8)。

譜 8

第2詩句「何故なら彼は生まれる綿雲にしか食欲がわからない。

動きそれから水面下にき

譜 9

える」Car il n'a faim que des (以下略)は、ピアノ部の低音が幻想的な旋律を歌うように奏でる。第4詩句後半「それから彼は突然潜る」et il plonge tout à coup は、ピ

下略) は、歌部上行の間、ピアノ部は付加2度分和音の4分音符でゆったり反行進する。

第19詩句「彼の結婚は明日行われるでしょう」Son mariage sera pour demain. 後は、ピアノ部に譜2を半音上げ用いる。この用い方は彼の落胆を和らげる。

第20-21詩句は、ピアノ部に原調の1音上ト長調を用い、譜1を再現する。この調は彼が儀式を気を取り直し、明日行う決意を暗示させる。第22詩句「まるで羽の目の模様が重すぎてそれから離れられないような彼の裾の長い衣装を持ち上げる」Il relève sa robe (以下略) は、ピアノ部の両手黒鍵によるグリッサンドが尾羽を畳む動作を描写する。さらに同部和音 Sol b_{M7}、Fam² 下降が落胆を表す。第23詩句「儀式はまた行われるでしょう」Il répète encore (以下略) は、ピアノ部が譜2を原調のフリギア調(属音上に終止、第7音 bmi)⁵に戻り再現し、第1曲を瞑想的に終わる。

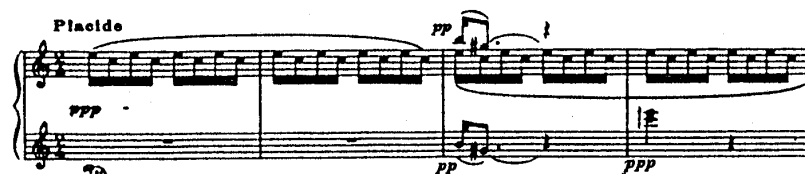
2. 「こおろぎ」 Le Grillon

詩は第40番、17詩句構成。詩句、第7-9は1段落構成。

曲は68小節構成。速度は静かに Placide、自由に À volonté、ゆっくり Lent と奏される。調はイ短-変ニ長-イ短-変ニ長と転調する。拍子は 2/4-自由に À volonté-2/4-3/4-2/4-3/4と変化する。演奏時間は約3分。

曲初は、ピアノ部が主音省略の分散和音16分音符で始まり、澄んだ繊細な響きが静寂を表現する(譜5)。

譜 5

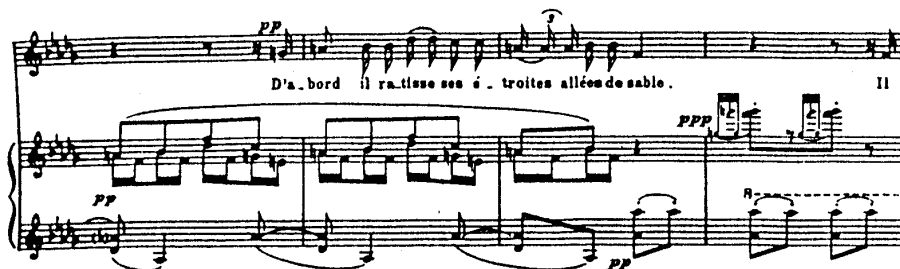


歌部、第2詩句「先ず砂の狭

い道を掃く」D'abord il ratisse (以下略)、第3詩句「彼はおが屑を作り隠れ家の戸口を広げる」Il fait du bran de scie (以下略)、第4詩句「しっこく悩ますこの大きな草の根を彼は磨く」Il lime la racine de (以下略) は、ピ

譜 6

アノ部の16分音符が付加2度裝飾音で、彼が根を執拗に磨くせかせかした動作を描写する(譜6)。



第5詩句「彼は休む」

Il se repose は、ピ

アノ部を休ませ、夜のしじまを暗示させる。6詩句「それから彼はごく小さな懐中時計のゼンマイを巻く」Puis il remonte sa minuscule montre. は、ピアノ部が譜5の音型を変化下降され用いられる。

第60小節は唯一歌部もピアノ部も沈黙し、周囲の静寂を効果的に暗示させ、第15詩句「何も聞こえない」On n'entend plus rien. を効果的に印象づける。第16詩句「森閑とした野原に、ポプラの木が空に向けて月を指すように立つ」Dans la campagne muette, (以下略) は、ピアノ部が主和音Réb₁に

第7詩句「誇らしげに、 譜 3

インドの王子の足どりで
たくさんの贈り物を身につけて歩き回る」Glorieux, il se promène (以下略) は、ピアノ部が変質和音 (全音音階の2系列)³を断片的リズムで反

復させ、さらびやかさの中に躊躇さ、心の揺れを暗示させる (譜3)。

第8詩句の後半「豎琴のように」comme une lyre. は、ピアノ部同音 \flat laの32分音符『』の断片が、鶏冠の震える様子を暗示させる。

ラヴェルは、第9詩句「婚約者は現れない」La fiancée n'arrive pas. に、ピアノ部中声を簡潔な10va. のアルペジオで表現する。ここで作曲者は、同詩句を8音節と数えず、会話時のLa fian-cée nar-rive pas. と6音符『』を記している。彼は散文詩の会話体を生かすため、無音の[ə]に音符を付けず最少の音を用いている⁴。フランス歌曲の伝統的な1音節1音符より、この技法はフレーズに斬新的な効果を与え、主役の状況を椰揄し印象づけた。

第10詩句「彼は屋根の頂に登り太陽を見る」Il monte au du toit (以下略) は、ピアノ部中声が ré から \flat mi上に、さらに \flat laから \flat si上に順次上行する。太陽を見つめた後、第11詩句「恐ろしい叫びを発する」Il jette son cri (以下略) は、ピアノ部が不安定な5/8拍子で付加2度音と変化音の32分音符6連『』を用いる。この手法は彼の騒がしさ緊迫感を表現する。

歌部第12、13詩句「レオン!、レオン!」Leon! Leon! と叫んだ後、ピアノ部が最少の音符2度のアルペジオで、第14詩句「婚約者を呼んでいる様です」C'est ainsi qu'il appelle (以下略) と皮肉を効果的にする。

第15詩句「何も現れず誰も答えません」Il ne voit rien. (以下略)、第16詩句「慣れっこの家畜らは少しも頭をもたげません」

譜 4

Les volailles habituées (以下略)、第17詩句「彼女らは褒めることに疲れ
てます」Elles sont lasses de l' admirer. は、ピアノ部が節分音の变化和音を反復多用する。この多

用は彼女らの慣れと無関心とを暗示させる (譜4)。

第18詩句「彼は庭に下り、美しいことを確信し恨むことができません」Il redescend la cour. (以

II. 「博物誌」 Histoires Naturelles 1906

J. ルナールは詩集「博物誌」全84詩を、代表作「にんじん」Poil de Carotte 1894年作の後、「ぶどう畑のぶどう作り」Le Vigneron dans sa vigne 1896年作と同年に完成させる。「博物誌」の作品化は、彼が1896年郷里シトリー Chitry の隣村ショーモ Chaumot に古い司祭館「あずまや」la Gloriette を借り²、農村の生活に接し誘発されたことによる。

1. 「孔雀」 Le Paon

詩は詩集第9番、23詩句構成。詩句、第2-6、第7-8、第9-10、第11-15、第17-18は各1段落構成。

曲は58小節構成。速度は、急がず気品をもって Sans hâte et noblement 奏される。調はへ長-イ長-変ロ長-変ホ長-ト長-変ニ長-へ長と変わる。拍子は 4/4-3/4-4/4-2/4-3/4-5/8-4/4-3/4-2/4-4/4 と頻繁に変化する。演奏時間は約5分。

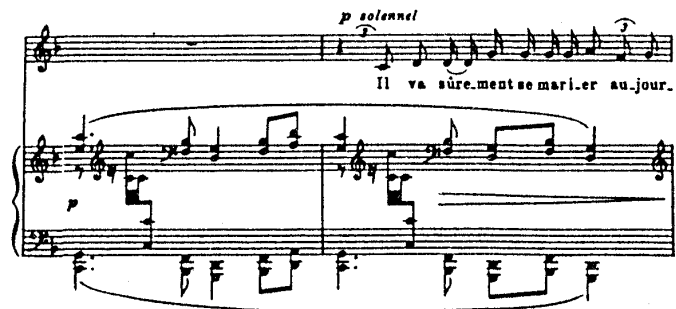
曲初は、ピアノ部の低声オクターブ（以下Ova.）が、2Ova. と4度（fa-b si）へ順次上行し、孔雀の堂々とした歩行の様を表現する。しかし同部の和音 Fa M9、La m7、Ré m7、Sol m9、Do 9、Fa M9、を連結し用い詩の暗さを暗示する（譜1）。

譜 1



堂々と胸を張って庭を一回りした後、ピアノ部は空虚5度（第3音略）の連続で、歩行停止を表現する。それに導かれ、歌部第1詩句「彼は今日結婚するはずです」Il va sûrement se marier（以下略）は、厳かに solennel と語り手の立場で、あっさりとした調子で始める（譜2）。

譜 2



再びピアノ部低声は、第3詩句「きらびやかに着飾って、準備している」En habit de gala,（以下略）で、譜1をリディヤ施法（第4音-本位 si）に変化、2Ova.（fa）で順次上行させ歩行彼の歩行開始を再描写する。

M. ラヴェルの歌曲 —博物誌 1906年作—

下山 進

Mélodies de M. Ravel —Histoires Naturelles 1906 —

Susumu Shimoyama

I. はじめに

フランス音楽の変遷において、描写的な表現方法は顕著である。その表現方法は簡潔明解に作品化され、フランスの現代音楽家へ脈々と継承される。即ちその方法を用い、作品を残した代表的な音楽家は、ルネッサンス期—ジャヌカン Clément Janequin 1485ごろ-1558を初め、バロック期—マレ Marin Marais 1656-1728、クープラン François Couperin 1668-1733、ラモー Jean Philippe Rameau 1683-1764、近代期—サン・サーンス Charles Camille Saint Sëans 1835-1921、シャブリエ Emmanuel Chabrier 1855-1899、ラヴェル Maurice Ravel 1876-1936、をへ、現代—メシアン Olivier Messiaen 1908-1993、を列挙できる。

これら伝統あるフランスの描写的な音楽の系譜のなかで、近代の音楽家ラヴェルは、歌曲集「博物誌」全5曲を作曲（30歳—1906年）した。ラヴェルは、この曲集にJ. ルナール Jules Renard 1864-1910の散文詩集「博物誌」1896年作を用いるについて、「素直で明解な言葉と深く隠された散文の詩情は長い間私を誘惑した」と述べる通り¹、作品の持つ独自の魅力に喚起され作曲した。その歌曲集は、散文詩の表現する動物の動作と律動的会話調との特徴を壊すことなく、諧謔的で描写的な面のみならず、むしろ内面的な人間としての暖かさを音楽に表現しまとめた。即ちこの曲集は、散文詩に対して的確で精緻な作品を残したと言える。「詩と音」との融合一体化、彼独自の近代フランス歌曲（メロディー—Mélodie）を発展させた。

この歌曲集の構成は、上記のとおりルナールの詩集「博物誌」から5つを選んでいる。その5曲の題名は、1. 「孔雀」 Le Paon、2. 「こおろぎ」 Le Grillon、3. 「白鳥」 Le Cygne、4. 「翡翠」 Le Martin-Pêcheur、5. 「ほろほろ鳥」 La Pintadeである。

本論では、ラヴェルの歌曲集「博物誌」全5曲について、彼が原文の詩句に対しどのような音楽手法を駆使し曲集に仕上げたか、主に音楽の諸要素を各小節に従い分析し考察する。合わせてこの作品の特徴を論じる。